

---

# 隠し物

龍狼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

隠し物

### 【Nコード】

N6044B

### 【作者名】

龍狼

### 【あらすじ】

彼女とずっと一緒にいるって約束を交したが、ずっと一緒って…

「よし、掃除も完璧」

今日は、理佳（彼女）が僕の家遊びにくる。部屋をこれでもかっ  
てぐらい頑張つて片付けた。片付けが終わりソファに腰かけて理  
佳を待った。

「そうだ、理佳が好きな花を飾らなきゃ」

押し入れから花瓶を取り出しテーブルに置いた。花瓶を置いたと同  
時に、玄関のチャイムがなった。

「やっと、来たかな？」

花を花瓶に乱雑に入れると玄関に向った。玄関を開けると理佳が立  
っていた。

「開けるの遅いよ」

怒った顔で僕を睨みつけるが、すぐに目をそらし中に入って行った。

「部屋、片付けた？」

「そりあ、理佳が来るから頑張つて片付けたよ」

「そうなんだあ。じゃあ、今から理佳のお部屋チェック」

理佳は笑顔で人差し指を立てた。

「まずは、ベッドの下」

理佳は膝をついてベッドの下を覗きこんだ。

「暗くて何も見えない。まあ、異常なしかな」

「もう、部屋の詮索はやめてくれないかな？」

「だめだよ。まだ一ヶ所目だよ。もしかして、理佳にみられたくない物でも隠してるのかなあ？」

不適な笑みで僕を見つめる。

「い、いやあ何も無いけど、あまり…」

「親から男には注意しなさいってよく言われてたからね。ってことで、チェック再開」

「はあ…」

僕は溜め息しかでなかった。でも、このまま押し入れをみられたら理佳はなんて言うだろう？

「次は、押し入れ」

考えをまとめきれないまま押し入れが標的にされた。

「あれえ？顔色悪いよ。押し入れに何か入ってるのかなあ？」

「べ、別に…」

考えがまとまっていけない、というのもあり見せる事にした。

『ガララッ』

音を立てて押し入れが開いていく。全て開け終わった時理佳は呆然と立っていた。

「…ね、ねえ…これは、いったいなんなのかなあ？」

声を震わせながら尋ねた。理佳の目の前には理佳自身が押し入れの中に入っているからだ。

「理佳は記憶ないのかなあ？僕とずっと一緒にいるって約束したのも忘れちゃったの？」

「…記憶？何を…言ってるの？…意味わかんない」

理佳は走って玄関に向かった。僕も走って理佳を追い掛けた。

「待ってよ」

「もう、話すことは無いし話も聞きたくない！」

「あ、あのさあ、この花、理佳の為に買ったんだ。理佳がこの花好きだって言ってたから」

理佳は靴を履き終わり僕の方を向いた。

「もう、今日からはその花大ッ嫌い！」

そう言うつと玄関のノブに手をかけた。

「サヨナラ！」

「どこにも、行けないよ」

理佳は何度も玄関を開けようとするが全く開かない。

「…クククツ。まだ、気付かないのかな？まあ、理佳が帰ってくるのは予想外だけどさ。もう、君を殺して三日目だよ。昨日も同じ時間に来て殺した時間まで一緒に遊んでいたんだよ。何度考えてもおかしいね。じゃあ、今日は何して遊ぼうか…？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6044b/>

---

隠し物

2010年12月9日14時52分発行